



Eight Olympians Project Vol.9

[エイト・オリンピックス・プロジェクト]

TOKYO2020へ、
そして **その先に**

Presented by 盛岡広域スポーツコミッション
[盛岡市 八幡平市 滝沢市 雫石町 葛巻町 岩手町 紫波町 矢巾町]

東京五輪出場が 最高の恩返し

カヌー競技(スプリントカヤック)日本代表

近村健太さん

カヌー競技スプリントは、リオ五輪で羽根田卓也選手が銅メダルを獲得したスラロームとは異なり、静水面でのスピードを競う競技だ。岩手のカヌー競技スプリントは不来方高校を中心に全国のトップレベルにあり、国体においては天皇杯、皇后杯の貴重な得点源になっている。2014年、希望郷いわて国体に向けた盛岡市役所スポーツ枠職員として採用され、現在はカヌー競技日本代表としても活躍を続ける近村健太選手から話を聞いた。

水本圭治さんに憧れて 不来方高校カヌー部へ

「盛岡市のスポーツ枠職員採用がなければ、自分は大学卒業時点で競技を引退していたと思います」

カヌー競技スプリントでインカレ3連覇の輝かしい実績を持つ近村健太は、2014年の大学卒業当時をこう振り返る。マイナー競技ゆえに企業のバックアップ等が望めず、トップクラスの選手が大学卒業と同時に現役を引退するのはさほど珍しいことではない。

近村がカヌー競技に関心を持つようになったのは、翌年に高校受験を控えた中学3年の秋。不来方高校の水本圭治選手が高校4冠の偉業を達成したことを、たまたまテレビのニュースで見ることがきっかけだった。

野球少年だった近村は、水本選手が高校入学まで競技経験がなかったことを知り、「是非自分も全国で活躍したい」との思いから、不来方高校への進学を決意する。



「なんとか漕げるようになるまで3ヶ月以上もかかりましたが、初めて自分の力で水を切って進むことができた時の爽快感は今も忘れられません。その感激は、インカレで初優勝したときよりも大きかったです」と懐かしそうに語ってくれた。

ライバルがくれた言葉 「一緒にTOKYOを 目指そう」

しかし、希望郷いわて国体での活躍、そしてその4年後のTOKYO2020を目指すことを決意し故郷に戻った近村を待っていたのは、必ずしも期待したとおりの環境ではなかった。

職場からさまざまな配慮は受けたものの、国内のライバル達の四分の一程度の練習時間しか確保できず、全日本の合宿や国体でも思うような結果を残せない現実に向き。日本代表だった近村は、この年の秋以降代表チームから外れることとなる。そして迎えた2016年秋。希望郷いわて国体での結果は4位。

優勝の二文字しか考えていなかった近村にとって、この成績は到底受け入れ難いものだった。それでも「今持っている力はすべて出し切った。いわて国体を機に競技生活にピリオドを打とう」そう決意すること。だが、ともに日本カヌー界をリードしてきた小松正治(愛媛県国体競技力向上対策本部)や宮田悠佑(和歌山県教育センター)といったライバル達の言葉に、彼のアスリート魂は激しく揺さぶられる。

「一緒にTOKYOを目指そう」

日本代表に復帰し再び 夢の舞台を目指す

競技に専念できるライバルたちに比べて練習環境の面で大きなハンデがある近村は、1分1秒の時間も無駄にしない練習計画の見直し、目標を達成する具体的なイメージづくりや食生活の改善など地道な努力を重ねる。

そして今年3月の日本代表候補選考会、続く4月に石川県小松市で行われた日本代表候補合宿でしっかりとその実力をアピールし、ついに日本代表復帰を果たすことになる。

近村は言う。「公務員アスリートの道を選んだことを後悔したことがないと言えます。嘘になります。でも今は違います。ライバルたちや職場の先輩・同僚の方々の励ましがあつたからこそ、TOKYO2020を目指す今の自分があります。社会人としても競技者としても本当に恵まれていることに感謝の気持ちしかありません」

近村は今、8月の世界選手権(ポルトガル)をはさむ6月から9月までの約4か月にわたる全日本の長期合宿に参加している。出発前、谷藤裕明市長にあいさつした際には、「全力でバックアップする。悔いのないようしっかり戦ってこい」との檄に対し、「必ずTOKYO2020代表の座を勝ち取ります」と応えた。

自分を支え、励ましてくれる多くの人々への感謝の思いを胸に刻みながら、夢の舞台TOKYO2020を目指す。



盛岡広域スポーツコミッション
の情報はこちらから



近村 健太 [ちかむら けんた]

1992年、盛岡市生まれ。上田中学校、不来方高校、立命館大学を経て盛岡市役所に勤務。カヌー競技でTOKYO2020を目指す。

